

「社会的エコロジズム」の立ち位置 ——エコロジズムと〈社会主義〉のイデオロギー的攻防——

The Position of “Social Ecologism”: The Ideological Conflict between Ecologism and <Socialism>

上柿 崇英
UEGAKI, Takahide

はじめに

これまでの環境思想研究においては、“環境倫理 (environmental ethic)” の名のもと、もっぱら「倫理的エコロジズム (ethical ecologism)」に焦点があてられ、倫理的ではない環境思想、例えば本論で「社会的エコロジズム (social ecologism)」と呼ぶ言説群に関しては、単純な文献紹介が大半であった。「社会的エコロジズム」とは、社会構造のラディカルな変革を志向するエコロジズムのグループであり、具体的には、エコ・マルクス主義 (eco-Marxism)、エコ・フェミニズム (eco-feminism)、ソーシャル・エコロジー (social ecology) などの言説群を指している¹。これらは“環境思想”という視点から見た場合、「倫理的エコロジズム」に並ぶ、もうひとつの言説カテゴリーを形成していたと見なすことができるのであって、それらを単に「倫理的エコロジズム」の“主流”に収まらない周辺の議論と見なすべきではない。

「倫理的エコロジズム」をめぐっては、確かにこれまでさまざまな総括が試みられてきたと言えるだろう。例えばわが国でも 2000 年代に入って注目を集めた“プラグマティズム的転回”は、この一連の総括の中から現れてきたひとつの方向性であると言って良い。しかし“環境思想史”という視点のもと、「倫理的エコロジズム」と「社会的エコロジズム」の双方を視野に収めながら、特に後者に主眼をおいた総括というものは、これまでほとんど試みられてこなかったのである。

本論ではこの「社会的エコロジズム」に焦点を当て、この思想が環境思想全体に対していかなる役割を果たしてきたのか、そして「倫理的エコロジズム」の衰退に伴う環境思想全体の混迷という事態において、なぜ主導的な力を発揮できなかったのか、といったことについて述べていきたい。注目すべきは、これらの言説を“イデオロギー”として見た場合、それらは本質的には〈社会主義〉という、別のイデオロギーによって再構築されたものであったということである。ここでの〈社会主義〉とは、19 世紀に起源を持ち、より多くの平等と社会的公正を志向する広義のイデオロギーを

指している。環境主義が現れる前夜、“オルタナティビズム”の中心的な位置にあったのは、つまり変革的な想像力の源泉として、いわゆる社会主義を包含する形で多くの変革的な思想を束ねていたのは、この〈社会主義〉であった。そして実のところエコロジズムとは、この〈社会主義〉から分離することで成立したもうひとつの“オルタナティビズム”だったのであり、「社会的エコロジズム」の真の立ち位置とは、いったん〈社会主義〉から分離したエコロジズムを、「倫理的エコロジズム」の限界を踏まえて、再び〈社会主義〉に埋め戻す試みに他ならなかったのである。

1. わが国における環境思想研究と「社会的エコロジズム」の位置付け

(1) 現代環境思想の中の「倫理的エコロジズム」

筆者は以前、環境思想史に関するひとつの整理を試み、その中で以下の点を指摘してきた²。①現代環境思想の決定的に重要なテーゼは、アメリカ環境主義の中から現れた“エコロジズム”が体现すること、②エコロジズムの主要テーゼに含まれる命題のうち、環境保護を正当化する普遍的な倫理原則——例えば自然や生命の内在的価値論——を志向する「(狭義の) 環境倫理学 (environmental ethics)」と、環境倫理が機能する土台となる新しい存在論——例えば“関係的・全体的場”の理論やアニミズムの復権——を提示することを試みた「ディープ・エコロジー (deep ecology)」は区別して考えるべきこと、③それでも両者に共通するのは、環境危機の根源を人間中心主義 (anthropocentrism) 的な世界観とそれに基づく倫理に見出し、それを新しい世界観や新しい倫理の提示によって克服しようとした点であること、④その意味において現代環境思想はきわめて“倫理主義的”であったが、環境危機は実際にはきわめて社会構造論的な問題として現前しており、そこに議論の方法論上の限界があったということ、そして最後に⑤現代環境思想が倫理的なものとして出発した背景には、実は歴史的必然性があり、それは環境主義以前に、特定の自然を保

存 (preservation) するかどうかの是非をめぐって争われてきた自然保護思想のあまりに強力な伝統と、さらには開拓民として出発したアメリカ人ならではの精神——それは特にウィルダネスに向き合う際に顕著に表れる——に起源を持つ、といったことである。われわれが現代環境思想と見なしている主要テーゼの大半、いわば主流の思想は、このような理由から「倫理的エコロジズム」と呼ぶことができるのである。

(2) “応用倫理学”として出発したわが国の環境思想研究

しかしエコロジズムに見られる“倫理主義”の問題は、わが国においては別の事情を考慮する必要がある。というのもわが国においては“倫理主義”以前に、“環境思想”がそもそも“環境倫理学”と同一視されてきた経緯があるからである。例えばわが国で“環境倫理”という場合、それは往々にして“倫理学”の中にある“応用倫理学”というカテゴリーのもとで現れる“環境”という個別課題群であると見なされてきた。そこには“倫理主義”を相対化し、より包括的な“環境思想”——あるいは“環境哲学 (environmental philosophy)”——から捉えるという視点はほとんど見られなかった。つまり環境学という大きな枠組みの中に“環境思想”があるのではなく、“応用倫理学”の中に“環境思想”が位置付けてしまっていたのである。

わが国の環境思想研究がこのような極端な形を取るようになったのには、もちろん明確な理由がある。そしてそれは、端的には加藤尚武の『環境倫理学のすすめ (1991年)』のもたらした絶大な影響であり、換言すればわが国の環境思想研究がそもそも、先に「(狭義の) 環境倫理学」として定義した一連の諸言説の輸入から始まったからに他ならない³。加藤が同書で提示している環境倫理学の本質的な三つの命題——すなわち①自然の生存権、②世代間倫理、③地球全体主義——はあまりにも有名であり、今日でもなお、環境倫理学の紹介やテキストの冒頭にはこの「加藤テーゼ」が無造作に取り上げられることが多い⁴。しかし「加藤テーゼ」はあくまで、現代環境思想を“応用倫理学”の視点から見た際に、既存の近代倫理学の枠組みをはみ出すセンセーショナルな観点を抽出したものであって、それがそのまま環境思想研究のガイドラインになるわけではなかった。しかし「加藤テーゼ」は、結果的にその後の環境思想研究を著しく拘束し、特にその根底にあった“応用倫理学としての環境思想”という隠れた命題が、“環境思想”が持つさまざまな潜在的な可能性を矮小化させてきてしまったのである。

(3) “倫理主義”を相対的に理解すること

以上のように、エコロジズムのメインストリームがそもそも“倫理主義”的であったこと、そしてそこに“応用倫理学としての環境思想”というわが国の事情が重なり、「社会的エコロジズム」はこれまでもっぱら周辺的な議論と見なされてきた。例えば海上は「社会的エコロジズム」をまとめたひとつの言説グループとして整理したが、これは例外的である⁵。むしろこれまでの研究においては、「社会的エコロジズム」に相当する枠組み自体が想定されず、言及は個別的なものに留まり、踏み込んだ考察が行われなかったのである。

確かにこの「社会的エコロジズム」の諸言説が、「主流派」とは異なり“社会的なもの”を強調しているという点は多くの人々が理解していた。しかしこれらの諸言説が“社会”を問題にする背景に、環境危機の根源に対する根本的な理解の相違があること、またその相違が何に基づくのかということは、十分に指摘されてこなかった。そしてこの点が不十分であることによって、例えば次のような間違いが起こりうるのである。例えばブックチン (Bookchin, M.) は後に見る「ソーシャル・エコロジー」の立役者であったが、彼の議論はある面では、主流のエコロジズムを批判し、“人間の自然に対する倫理を問う前に、人間社会の内部にある不公正と不平等に目を向けよ”というアンチテーゼを立てた思想として理解可能である。そしてこの問題提起は、“人間と自然の間にある公正”と“人間と人間の間にある公正”の折り合いをどのように理解し、考えていくのかという問いに繋がるものであろう。実はこれは環境的正義 (environmental justice) の議論に直結する、それはそれで重要な観点である。しかしこのような理解は、実はわれわれが先に見た“環境思想”を無造作に“倫理的”な言説として理解するある種の歪曲を含んでいるのであって、それは“環境思想”という観点に立つて見ると、言説の核心部分は別のところにあることに気づかされるのである⁶。

われわれはエコロジズムを問題にする際、そこからいったん“倫理的”なバイアスを取り除いて考えてみる必要がある。そのためには、個々の言説を“思想”として、すなわち“イデオロギー”として捉えることの意味について確認しておかなければならない。ここでの“イデオロギー”とは“思想”の持つ言説としての潜在力を指し、それは必ずしも“政治的”である必要はない⁷。しかし“思想”と呼ぶに値する言説、あるいは“イデオロギー”として成立している言説には、必ず何らかの形で以下の三つの条件が含まれている、ということである。つまり①われわれが置かれている

世界（あるいはその状態）を理解／説明するための独自の体系的な枠組み、②われわれが本質的に到達すべき理想状態のイメージ、③その体系的な枠組みから導出される、理想状態へ移行するための契機、という三つの条件である。

したがって特定の言説が“環境思想”として理解できるということは、その言説が“環境危機とそれに直面した現在のわれわれ”を理解し説明するための何らの体系的な枠組みと、環境危機を克服した“理想状態”、そしてそこへ至るための契機というものを、少なくとも含んでいるということに他ならない。そしてわれわれが本論で「社会的エコロジズム」と呼ぶ諸言説は、基本的にはこの条件を満たしているのである。つまり先のブクチンの例で言うならば、“環境思想”の観点から見て重要なことは、彼が“人間—自然間の公正”に対して“世代内の公正”の原則を積極的に擁護したということではなく、むしろ彼が環境危機をどのような枠組みにもとので理解していたのか、またその枠組みが「ディープ・エコロジー」などの「倫理のエコロジズム」とどう違ったのか、といったことになるはずだったのである。

2. 「社会的エコロジズム」の諸言説

ここからは「社会的エコロジズム」の諸言説について具体的に見ていきたい。前述のように本論で「社会的エコロジズム」という場合、それは大きく「エコ・マルクス主義」、「エコ・フェミニズム」、「ソーシャル・エコロジー」という三つのサブグループを含むものとして想定されている。これら三つの言説に共通するのは、環境危機は現在の延長で克服することはできないというラディカルな変革の志向性を持ち、かつその変革の方向性が「倫理のエコロジズム」のように人間中心主義を初めとした“世界観”ではなく、環境危機をもたらしている“社会構造”に向いているということである。そしてもうひとつの共通点として、これら三つがいずれも「倫理のエコロジズム」のラディカルな問題提起——特に「ディープ・エコロジー」のそれ——に触発される形で、主に80年代を中心として現れてきたということがあげられよう。

(1) エコ・マルクス主義

それでは「エコ・マルクス主義」から見ていこうと思うが⁸、ここでわれわれは先に見た“イデオロギーとしての三つの条件”を手がかりにする形で、それぞれの言説群の思想的な枠組みについて具体的に概観していきたい。

まず「エコ・マルクス主義」の本質は、“環境危機”

の根源が“資本主義的生産様式”にあると見なしているところにある。例えば「倫理のエコロジズム」では環境危機の根源は世界観の問題として理解されるが、環境危機の直接的な原因については、人間の自然に対する“無配慮な行動の集積”がもたらす過度の環境負荷に求められてきた。つまり直接的には人間の行動を問題にしているからこそ、その行動の根底にある世界観を問題にしてきた側面があるわけである。これに対して「エコ・マルクス主義」は、この“自然に無配慮な行動の集積”に見えるものが、実は絶え間ない競争によって構造的に生産の無政府状態を作り出す資本主義的生産様式の帰結であると考える。賃労働と私有財産制によって基礎づけられる社会では、まず生産手段が一部に集中する。蓄積された資本は絶え間ない拡大再生産の圧力に晒されており、それは複雑な競争関係によって、必然的に過剰生産をもたらしていく。例えば環境負荷とは過剰廃棄であり、過剰廃棄とは過剰消費に由来するものである。しかし過剰消費の根本にあるには、制御不能な、その過剰生産なのである。

「エコ・マルクス主義」は、環境危機の根源を説明しようとする点で、確かに単なるマルクス主義には還元できない側面を持っている。そしてこのことは、この言説群が想定する“理想状態”についても言える。例えば伝統的なマルクス主義の理想状態は、ある面において長年、技術万能主義的なテクノポリスであった。これに対して、「エコ・マルクス主義」の理想状態は、人間と自然が調和した牧歌主義的な社会であり、それは「倫理のエコロジズム」の理想状態を継承したものとなっている。しかし後者のように人間と他の生命の公正を問題にする前に、人間と人間の公正の実現を前提条件として加えるところが、両者の大きな違いである⁹。むしろ人間と人間の公正を実現する生産様式の変革（社会主義への移行）が、結果的に「倫理のエコロジズム」の希求した理想を実現するのであり、その逆ではないと理解するのである¹⁰。

「エコ・マルクス主義」からすると、環境破壊的な行動の根底にあるものを人間中心主義的な世界観に求めた「倫理のエコロジズム」は、環境危機の根源を読み違えていたことになる。そしてそれゆえに、環境危機を克服し、そのため理想状態へ至るための契機についても、「倫理のエコロジズム」の説明は間違っていたことになる。なぜなら彼らからすれば、環境破壊的な行動の根底にあるのは、先の過剰生産を引き起こす“生産の無政府状態”であって、それはあくまで人々の意志から独立した生産諸関係の帰結として現れているものだからである。

したがって「エコ・マルクス主義」が変革の契機とするのは、やはり“計画”となる。というのもこの“計画”は、資本制社会の特徴が“生産の無政府状態”である以上、この認識から理論的かつ必然的に導出されるものだからである。もっとも伝統的なマルクス主義では、“生産の無政府状態”が必然的に物質的な不平等と搾取をもたらし、最終的には過剰生産によって恐慌を引き起こすことが、社会を“計画”へと向かわせる直接的な契機になると考えられてきた。これに対して「エコ・マルクス主義」においては、社会主義への移行はもうひとつのシナリオによっても説明される。すなわち“生産の無政府状態”が必然的に環境を破壊し、資源枯渇と汚染に伴う過少生産が“計画”へと向かうもうひとつの原動力になる、というものである¹¹。

確かにここでの“計画”が何を意味するのかについては、必ずしも全員が一致するわけではないだろう。例えばそれは国家が主導する“計画”なのか、あるいは互助組織による合議なのか、さらにはそれが、いわゆる“人間と自然の物質代謝”の制御を目指すのか、あるいは直接的にせよ、潜在的にせよ所有制度の変革までを含むのかどうか、といった点はさまざまな見解があり得るだろう。しかしおそらく次の点では「エコ・マルクス主義」は一致している。すなわちここでの“計画”はソ連や東欧で行われたもの——すでに深刻な環境破壊をもたらしたことで知られていた——とは異なるものになるはずだし、それとは異なる真の“計画”のあり方が存在するはずだと確信している、ということである。“計画”というキーワードは、「エコ・マルクス主義」が環境危機の根源を資本主義的生産様式に求める以上、取り除くことはできない。しかしこうして、“生産の無政府状態”から“計画”へ、という対抗軸があるからこそ、ここでは人間と人間の公正の実現が、人間と自然の公正と結びつくのである。

(2) エコ・フェミニズム

次に「エコ・フェミニズム」について見てみよう。まず「エコ・フェミニズム」の環境危機に対する理解には二面性がある。そのためわれわれは「エコ・フェミニズム」を、「カルチュラル・エコフェミニズム (cultural eco-feminism)」と「ソーシャリスト・エコフェミニズム (socialist eco-feminism)」に便宜上分けて考えることにする¹²。このうち前者は「ディープ・エコロジー」に密接に結びつく形で現れた最初のものであり、後者は前者に対する批判も受けながら形成されてきたものである。興味深いのは、前者が世界観を問題とする「倫理的エコロジズム」の枠組みを共有しているのに対して、後者において「エコ・フェミニズム」

は、本当の意味で「社会的エコロジズム」として展開されたという点である。

まず「カルチュラル・エコフェミニズム」は、「ディープ・エコロジー」の“派生物”であると考えられることができる。例えば彼女たちは「倫理的エコロジズム」と同じように、環境危機の根源を人間中心的な世界観にあると考えており、彼女たちの理想状態は、やはり人間と自然の調和した牧歌主義的な社会にある。そして変革の契機となるのもまた「ディープ・エコロジー」に見られるような、生命中心的存在論やアニミズムの復権である、といったようにである。

しかし彼女たちの主張が他の「ディープ・エコロジー」から区別されるのは、彼女たちが掲げるオルタナティブな世界観において、“女性”が特別な意味を持っているからである¹³。彼女たちは“女性”が本質的に産む性であり、再生産を担う、共感的なコミュニケーション——ケアの倫理——に優れた存在であることを強調し、このことが変革において重要な役割を果たしうると考える。またその神秘主義的局面においても、例えば月の周期や自母神信仰が意識され、一貫して“女性的な原理”が強調されるのである。

しかし実はこのことは、環境危機に直面した文明のあり方、すなわち技術中心主義的で、合理性の名のもとに自然を人間のための道具と見なし、自然の支配を希求する人間中心主義とされる精神を、“男性的な原理”に結びつけることの裏返しでもあった。つまり「カルチュラル・エコフェミニズム」は、人間からの自然の解放というテーゼと、男性からの女性の解放というテーゼの構造的な類似点を契機として、特に人間中心主義と男性中心主義を結びつけることで成立した側面があるのである。このことはある面では非常に皮肉な帰結であると言える。というのもフェミニズムは——特に60年代に活性化した“第二次フェミニズム”においては——ジェンダー概念を想起するように、われわれが“女性らしさ (男性らしさ)”と見なす原理の大半を文化的に構築されてきたものとして理解し、一貫してその二元論の“脱構築”を希求してきた側面があるからである。つまり「カルチュラル・エコフェミニズム」は、二つのテーゼを重ね合わせた結果、フェミニズムが本来目指してきた方向性とは逆に、“性差”を固定化し強調するものとなるのである¹⁴。

こうした葛藤の中から存在感を現わしてきたのが「ソーシャリスト・エコフェミニズム」であった。つまり“男性性”と“女性性”の二元論に陥ることなく、“再生産”や“ケア”といった「カルチュラル・エコフェミニズム」の積極面を継承するひとつの解決策と

して、問題の本質を社会構造に結びつける、という方法である。「ソーシャリスト・エコフェミニズム」は環境危機の根源を説明する際、一方でいかに自然支配と女性支配の世界観が絡み合いながら成立してきたのかを論じるが、他方でその世界観がいかに現実の社会様式に体现されてきたのかを論じる¹⁵。つまり世界観の問題を踏まえながらも、変革において決定的に重要なのは、それが転化された、端的には“家父長制的資本主義”という社会構造にあると考えるのである。家父長制的資本主義は、一方で“生産の無政府状態”を通じて環境と生命を破壊する。しかしそれは同時に、女性を“シャドーワーク”に縛り付け、それによって初めて成立している。この理解に「ソーシャリスト・エコフェミニズム」の思想的核部分があるのである。

したがってここでの変革の契機は一方でやはり“計画”を含むことになる。ただしその“計画”のイメージは「エコ・マルクス主義」とは異なるものになるだろう。なぜなら彼女たちは一連の議論の経緯を受けて、社会的公正と同時に、“再生産”や“ケア”といった一連のキーワードを用いて、それを新しい社会様式の模索するための契機とすることになるからである¹⁶。

(3) ソーシャル・エコロジー

最後に、「ソーシャル・エコロジー」について見ていこう。われわれが先にいったん言及したように、この言説群もまた、独自のイデオロギーとしての枠組みを持っている¹⁷。

まず「ソーシャル・エコロジー」は、他の「社会的エコロジズム」と同じように環境危機の根源を世界観に見出す枠組みを退けるが、かといってそれを“生産の無政府状態”に求めるわけではない。彼らはむしろ、それを人間社会内部の支配と被支配の構造、すなわち社会的なヒエラルキーのもたらす力学に見出し、資本制社会以前に、ヒエラルキー的な人類史そのものを問題とするのである。例えばブクチンによれば、人間存在の最初の共同体においては、集団の規模は小さく、構成員は実質的に平等であった。しかし共同体の内部にいったん支配の構造が現れるやいなや、ヒエラルキーは周囲の非支配的な共同体を飲み込み拡大していくことになる。最初の支配は、老人支配、シャーマン支配、英雄支配という形で共同体に現れた。しかしいったんヒエラルキー化した社会は強大となり、平和的で平等主義的な共同体を破壊しつつ、いっそうヒエラルキーを深化させ、またいっそう強大になっていく。例えば国家や資本制社会というのは、実はこうしたヒエラルキーが深化した形態なのである。「ソーシャル・エコロジー」の議論の核心は、こうした社会内部の支配

と被支配の構造が、人間社会の外部にまで拡張していくと考えるところにある。つまり人間社会に現れた支配の力学は、その延長として自然に対する社会の振る舞い方となって現れるということ、換言すれば、“支配する人間”の“支配される人間”に対する関係が、ここでは“社会”の“自然”に対する関係に投影されるわけである。そしてこの最終的な帰結こそが、われわれが環境危機として理解しているもののもっとも根底にある、ということなのである。

この枠組みからすれば、資本制社会はあくまでヒエラルキーの最高段階として理解できるのであって、問題の核部分“生産の無政府主義”ではなくなる。むしろ社会の内部にヒエラルキー、つまり支配の構造そのものがある限り、自然と社会の調和は実現しない、ということになるわけである。確かに、「ソーシャル・エコロジー」も理想状態は、人間と自然が調和した牧歌主義的社会である。しかし一連の理解が根底にあるからこそ、われわれが先に見たように、人間と自然の関係を問題とする前に、まずは人間と人間の問題を問うべきだ、という命題が出てくるわけである。

「ソーシャル・エコロジー」の目指す方向性は、したがって世界観の変革ではなく、社会構造の変革である。しかしそれは問題の根源を社会的ヒエラルキーそのものに求めるために、重視される契機もまた“計画”とは違ったものになるだろう。重要なことは、われわれが人類史のきわめて長い期間において深化させ続けてきた支配の構造を、ついにわれわれ自身が克服し、いかに真に自由で平等な社会を作り上げることができるかどうか、ということになるのである。したがって、「ソーシャル・エコロジー」の希求する牧歌主義的社会においては、資本制社会だけでなく、国家もまた批判されなければならない。そこでは、人々は互いに自由で平等な存在であるような、人間存在に相応しい規模での自治都市を核として生き、社会はこうした自治都市連合体を目指すことになる。環境危機を防ぐのは、そうした人間存在の自治の力によるのである。

3. “エコロジズム”と“社会主義”

(1) 「社会的エコロジズム」はエコロジズムなのか？

われわれは以上を通じて「社会的エコロジズム」の諸言説を、“環境思想”という視点から、特にそのイデオロギーとしての理論的な大枠を理解することを念頭に、具体的に見てきた。“環境思想”のイデオロギー的な条件とは、環境危機の根源をめぐる体系的な分析枠組みと、目指すべき理想状態、そして克服の契機の三つであり、われわれが確認してきたように「社会的エ

「エコロジズム」は、確かにこの三つの条件を満たしていた。注目すべきは、これらの言説グループが、細かい差異を含みつつも、目指すべき理想状態という点においては、いずれも人間と自然が調和した牧歌主義的社会という共通したイメージを持っていたということ、そしてそれは明らかに彼らが「倫理的エコロジズム」から引き継いだものであるということである。むしろそこでは、「倫理的エコロジズム」が提起した理想の実現を目指すからこそ、議論の枠組みを社会構造論的な局面にシフトさせた側面があった。つまり「社会的エコロジズム」は、この点において確かに、イデオロギーとしてのエコロジーを“社会的”に転回する試みだったのである。

しかしここでひとつの問題が現れる。それは以上の点を踏まえてもなお、これらの「社会的エコロジズム」を本当にエコロジズムと呼んでいいのか、という問題である。例えば環境危機を初めてイデオロギーの形で主題化した「倫理的エコロジズム」は、確かに本質的に新しいものであった。しかし「社会的エコロジズム」の場合は、確かに理想状態を「倫理的エコロジズム」から継承しているものの、彼らが用いている理論的な枠組みは、すべて既存の社会理論をそのまま応用している側面があるということである。それはマルクス主義であり、フェミニズムであり、アナーキズムであるわけだが、これらはいずれも環境危機が主題化される以前に形成された社会的イデオロギーであると言って良い。例えば端的には「エコ・マルクス主義」は“エコロジズムの一種”である以前に“マルクス主義の変種”である、とは言えないのだろうか。

実はここに、エコロジズムの思想史において、きわめて重要な意味が潜在しているのである。そしてそのことを理解するためには、先のマルクス主義、フェミニズム、アナーキズムの三つが、実はより広い意味では〈社会主義〉という、共通のイデオロギー的なプラットフォームの上に構築されたものであったことを確認する必要があるのである。

(2) オルタナティブイズムとしての〈社会主義〉

社会主義 (socialism) という概念は、今日多くの誤解に満ちている。しかしその本来の意味とは、個人主義に還元されない集団的なものに配慮する、というきわめて広い概念であった。そしてそれが現れたのは19世紀の英仏であり、当時それは、劣悪な労働条件で酷使される労働者の福祉を向上させるという具体的な問題と結びついていた。変革的なイデオロギーの最初のもは確かに自由主義 (liberalism) であった。それは不当な権力から個人を解放し、法的秩序に基づけら

れた自由な社会を希求するものであった。しかしそのような建前で実際に改革された社会は、結局一部の人間だけの自由であり、同時に著しい不平等を生み出すものでしかなかった。つまりイデオロギーとしての社会主義とは本来、この自由主義に基づいた19世紀の社会状況を受けて、より多くの平等と社会的公正を希求する、というものだったのである。

しかし“科学的社会主義”を掲げたマルクス主義が興ると、社会主義の概念はその絶大な影響力のもと、階級理論と史的唯物論に基づいて定義されるものへと変容した。そして第二次大戦後、スターリン批判によってその権威が揺らぎ始めるまで、実質的に社会主義は、この“伝統的なマルクス主義”とほぼ同義語だったのである。一般的に彷彿とされる社会主義の概念は、この歴史的経緯をきわめて強く帯びている。しかし60年代は社会主義にとって大きな転機であり、ここから“科学的社会主義”を相対化しながら、社会主義を本来の姿に立ち返らせる機運が現れてくる。この“戦後社会主義”の特徴は、一方で単に階級闘争を問題にするのではなく、より多くの平等と社会的公正という社会主義本来の含意を継承しながら、他方で全体主義への反省から、個人的自由に基礎づけられた社会主義を希求したところにあった。彼らが掲げた自由と連帯は、国境や宗教、人種、性別を越えた普遍主義であり、そこからオルタナティブな社会を実現することがついに社会主義の理想となったのである。

このように歴史的経緯をたどると、社会主義概念はいくつかのねじれを経験しながらも、その根底にあったのはより多くの平等と社会的公正を達成するという理想の原則であり、それがさまざまな理論の衣をまといつつ、形を変えてきたことがわかる。そしてそれは“今とは異なる理想社会”、あるいは“オルタナティブな世界は可能か”という問いを持つ人々にとって、一貫してその靈感の源であり続けた。本論で〈社会主義〉という形で定義したい広義の概念は、この“オルタナティブイズム”のことを指しているのである。

したがってマルクス主義は、伝統的なそれも、戦後のそれも、いずれも〈社会主義〉の派生物として理解できることがわかる。それではフェミニズムやアナーキズムはどうだろうか。まず女性の参政権を目指す運動から始まったフェミニズムは、戦後、シャドーワークによる隠れた抑圧とジェンダーの脱構築という新しい課題に向かったが、その出発点は“女性の解放”であって、その命題は平等と社会的公正を理想の原動力とする〈社会主義〉とは初めから重なり合っていた。他方アナーキズムと〈社会主義〉の結びつきはさらに

古く、端的には前者がもともと 19 世紀に“科学的社会主義”への反発によって分化した後者の一派だったということ、またわれわれの知るアナキズムは、戦後において資本制社会を批判するマルクス主義よりもさらにラディカルな自由を希求するアプローチとして再興されたものであるということである。つまりこれら三つの言説群は、その形成過程からいずれも〈社会主義〉に結びついていたのである。

これらの三つの言説群が戦後社会の議論においても、しばしば互いに相容れない応酬を繰り返して来たのは事実である。例えばマルクス主義は、アナキズムが過度に理想に走り大概にして政治的な手順を軽視していると批判し、これに対してアナキズムは、マルクス主義者が国家や権力というものの本質をわきまえていないと返した。そしてフェミニズムは、マルクス主義もアナキズムも、自分自身の考えの中に潜む男性中心主義の影に、もっと敏感になるべきだと訴える、といったようにである。しかしそれにもかかわらず、これらはいずれも、より多くの平等と公正や個人の自由と普遍主義的な連帯という一連の理想を、プラットフォームのように共有していた。これらの言説群はいずれも〈社会主義〉の持つオルタナティブへの豊かな想像力を手がかりにしてそれぞれの社会理論を成長させてきたのであり、ここに見られる相違は結局、この〈社会主義〉という理想をいかなる方法で実現するかという違いに過ぎないのである。

(3) 「社会的エコロジズム」に内在する、潜在的なイデオロギー闘争

ここでわれわれは、再びエコロジズムに目を向けよう。思い出してほしいのは、特に環境主義が現れ、それがエコロジズムへと展開されてきた時期が、あの〈社会主義〉の本分へと回帰した“戦後社会主義”の黄金期と重なり合うことである。そしてそれがオルタナティブな想像力をかき立てる強力なイデオロギーであったのと同じように、「倫理のエコロジズム」もまた、オルタナティブな世界を希求するオルタナティブイズムであった、ということである。実際、環境主義の初期の担い手は、戦後社会主義を支えた人々と重なり合っていた。しかし「倫理のエコロジズム」のテーゼが明確になるにつれて、それは〈社会主義〉とは異なる理想状態を目指していることが自覚されるに至ったのである。つまりエコロジズムが勃興したとき、それは同時に〈社会主義〉という“従来のオルタナティブイズム”から“新しいオルタナティブイズム”が分離するという事態を意味していたのである。

エコロジズムがこれだけ大きな影響力を持ったのは、

それがオルタナティブイズムとして豊かな潜在力を持つものだったからである。そして実際環境危機という命題は、このエコロジズムの思想的な下支えによって、多くの人々を喚起した側面があった。しかしエコロジズムは先に見た“倫理主義”の限界によって、やがて影響力を失っていった。それは換言すると、エコロジズムという“新しいオルタナティブイズム”の危機だったのである。

われわれがこれまで見てきたように、「社会的エコロジズム」は、「倫理のエコロジズム」に対する批判から、それを社会構造論的に転回することによって生まれたものであった。そして彼らの掲げた理想は明らかに「倫理のエコロジズム」のそれを継承しようとするものであり、それぞれの言説はそれぞれの形でイデオロギーとしての環境思想に必要な、三つの条件を満たすものであった。ここでわれわれが考えなければならないのは、それにもかかわらず、この「社会的エコロジズム」がなぜ、結果的にエコロジズム全体の衰退を止めることができなかったのか、そしてなぜ「倫理のエコロジズム」に替わる新しいエコロジズムの潮流として主導的な力を発揮できなかったのか、ということである。

われわれは別のところで、先に「社会的エコロジズム」は本当にエコロジズムと呼ぶに相応しいかという問いを立てた。本論のそれに対する答えは、次のようなものである。すなわち「社会的エコロジズム」は確かに環境危機を主題化したイデオロギーの条件を満たしていても、それは本質的にはオルタナティブイズムとしてのエコロジーを引き継いだのではなく、実質的にはいったん分離したイデオロギーとしてのエコロジーを、オルタナティブイズムとしての〈社会主義〉に再び埋め戻す試みでしかなかった、ということである。

「エコ・マルクス主義」、「エコ・フェミニズム」、「ソーシャル・エコロジー」が理論的な支柱にしているのは、戦後のマルクス主義、フェミニズム、アナキズムであって、それらはわれわれが見てきたように〈社会主義〉の“子どもたち”なのであった。彼らは環境危機を論じているように見えて、実のところ、間接的に〈社会主義〉を論じていたのである。

したがって、「社会的エコロジズム」がエコロジズムの衰退を食い止めることができず、また「倫理のエコロジズム」の周辺的な議論としてしか存在感を発揮できなかった原因は、このように理解できるだろう。まず第一に、特に 90 年代以降、東側世界の崩壊、新自由主義の台頭、グローバリゼーション、北欧型福祉国家モデルへの注目、などさまざまな社会的状況の変化に

よって、まず〈社会主義〉というイデオロギー自体が、以前ほどオルタナティブな想像力を喚起できなくなってきたことがある。〈社会主義〉はそれぞれの時代に依拠して“理論の衣”を変えてきたが、今日それは“戦後社会主義”に代わる新しいモデルを見つけ出せずにいる。つまり「社会的エコロジズム」は〈社会主義〉そのものの衰退によって、思想的なインパクトを持続できなくなっていったのである。しかしより重要なのは第二の点、すなわち〈社会主義〉がそもそも環境危機を想定していなかった時代のイデオロギーであり、彼らがそもそも環境危機を想定していない社会理論を議論の軸に据えてしてしまったこと、ここにあるだろう。

エコロジズムを〈社会主義〉によって再生させる試みは、失敗に終わった。しかし「社会的エコロジズム」が「倫理的エコロジズム」の限界を踏まえ、エコロジの社会理論を追究したこと自体は正しかったのである。これからの環境思想に求められているのは、借り物の社会理論に満足するのではなく、「倫理的エコロジズム」の成果を活かすことができる、エコロジズム独自の新しい社会理論を構築していくこととなるだろう。そのためには、われわれはいったんエコロジズムの出発点である環境主義にまで立ち返らなくてはならないかもしれない。環境主義の原点は、実のところ近代批判にあった¹⁸。それはかつて〈社会主義〉の諸理論が、ひとつの近代批判から出発したようにである¹⁹。つまり新しい試みとは、近代批判の社会理論を〈社会主義〉とは異なるやり方で、すなわち環境時代に相応しいやり方でやり直すということに他ならない。

【参考文献】

- 上柿崇英 (2009) 「個別学術領域としての“環境思想”は存在しうるか」『環境思想・教育研究 (第3号)』環境思想・教育研究会
- 上柿崇英 (2010) 「環境論的知の転回とその射程——『五つのリアクション』における近代批判の立体的構造」『唯物論研究年誌』青木書店 15号 pp.105-129
- 海上知明 (2005) 『環境思想—歴史と体系』NTT出版
- 加藤尚武 (1991) 『環境倫理学のすすめ』丸善ライブラリー
- 清水哲郎 (2010) 『生命と環境の倫理』放送大学教育振興会
- 丸山正次 (2006) 『環境政治理論』風行社
- Bookchin (1990) *Remaking Society*. South End Press. (ブクチン『エコロジと社会』藤堂麻理子／戸田清／萩原なつ子訳 白水社 1996年)
- Dobson (1995) *Green Political Thought*. Routledge (ドブソン『緑の政治思想』松野弘監訳 ミネルヴァ

- 書房 2001年)
- Diamond and Orenstein (1990) *Reweaving the World*. Sierra Club Books (ダイヤモンド／オレンスタイン『世界を織りなおす』奥田暁子／近藤和子訳 学芸書林 1994年)
- O'Connor (1998) 'Capitalism, Nature, Socialism: A Theoretical Introduction' in *Capitalism, Nature, Socialism*. Vol.1, pp.11-38
- Hardin (1974) 'Living on a Lifeboat' in *Stalking the Wild Taboo*. William Kaufmann Inc, pp.221-241, 1978. (ハーディン『地球に生きる倫理』松井卷之助訳 祐学社 pp.264-284 1975年)
- Mellor (1992) *Breaking the Boundaries*. Virago Press. (メラウ『境界線を破る!』尋福眞美／後藤浩子訳 新評論 1993年)
- Merchant (1992) *Radical Ecology*. Routledge. (マーチャント『ラディカル・エコロジー』河本隆／須藤自由児／水谷広訳 産業図書 1994年)
- Merchant (1980) *The Death of Nature*. Harper & Row. (マーチャント『自然の死』団まりな／垂水雄二／樋口祐子訳 工作舎 1985年)
- Pepper (1993) *Eco-Socialism*. Routledge. (ペーパー『生態社会主義』小倉武一訳 農文協 1996年)

【注】

- ¹ 筆者は以前“現代環境思想”の類型論として、「倫理的エコロジズム」(「権利派エコロジー」と「ディープ・エコロジー」を包含する)と「社会的エコロジズム」を入れ子状に位置付けられる“エコロジズムの三言説群”という形で論じたことがある(上柿 2009)。ただし本論では「権利派エコロジー」はより適切と思われる「(狭義の)環境倫理学」に変更した。
- ² 上柿 (2009)。注1も参照。
- ³ 加藤 (1991)。
- ⁴ 例えば、清水 (2010)。
- ⁵ 海上 (2005)。
- ⁶ この“倫理的歪曲”によって、「ディープ・エコロジー」もまた長年歪められて理解されてきた(上柿 2009)。
- ⁷ この“イデオロギー”の三つの条件は、Dobson (1995) からヒントを得た。
- ⁸ ここでの「エコ・マルクス主義」の記述はペッパー (Pepper 1993) およびオコンナー (O'Connor 1998) の議論を中心にまとめたものである。なお「エコ・マルクス主義」という呼称は、その先鋒がペッパーであることを考えれば「エコ・ソーシャリズム (eco-socialism)」の方が適切である。しかし本論では、“社会主義”は全体を貫くキーワードになるため、誤解を避ける目的でこのように表記した。
- ⁹ すなわちここでは過激な人口抑制を含むネオマルサス主義——例えば Hardin (1974) ——は排除される。
- ¹⁰ この傾向は、ペッパーを典型として非常に強く現れる。
- ¹¹ この考えは、オコンナーを典型に現れる。
- ¹² 「エコ・フェミニズム」の類型化には、いくつかの議論がある。Dobson (1995) は、本論で「カルチュラル・エコフェミニズム」に相当する「差別的フェミニズム」と、二元論の脱構築を目指す「脱構築的フェミニズム」という別の対抗軸を用いている。また Merchant (1992) は、「カルチュラル・エコフェミニズム」と「ソーシャリスト・エコフェミニズム」の他、ブクチンの影響を受けた「ソーシャル・エコフェミニズム」を区別している。さらに丸山 (2006) は、「カルチュラ

ル・エコフェミニズム」、「脱構築的エコフェミニズム」、「ソーシャリスト・エコフェミニズム」の三つを区別している。

¹³ Diamond and Orenstein (1990)

¹⁴ Merchant (1992)

¹⁵ この論点に関する古典的な文献として Merchant (1980) がある。

¹⁶ Mellor (1992)。

¹⁷ 先に言及したように「ソーシャル・エコロジー」の提案者はブックチンであり、それはほとんどブックチンの思想として扱っても間違いない。以下の論点は Bookchin (1990) による。

¹⁸ 上柿 (2010)

¹⁹ 今回は踏み込めないが、〈社会主義〉は近代批判から出発したものの、実際はもうひとつの近代に過ぎなかった。